

令和 2 年 6 月 10 日現在

機関番号：38002

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02151

研究課題名(和文) 沖縄・宮古島におけるマリンツーリズムに関する観光社会学的研究

研究課題名(英文) Sociology of tourism on marine tourism in Miyakojima, Okinawa

研究代表者

圓田 浩二 (MARUTA, KOJI)

沖縄大学・法経学部・教授

研究者番号：10369209

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、近年、観光ブームでわく沖縄の、主要な観光行動メニューであるマリンツーリズムに関する観光社会学的研究である。本研究の目的は、沖縄県宮古島におけるマリンツーリズムの現状と課題について、歴史的に、そして種目ごとに、社会的に調査・分析することにある。宮古島は、近年観光開発が進み、「青い海と白い砂浜」を観光資源化し、観光による経済発展を遂げてきた。宮古島のマリンツーリズム関係者や観光客、地元住民、公的関係者に対するインタビュー調査と参与観察によって分析・考察し、ビーチリゾートとしての発展と限界、マリンツーリズムの抱える問題点と課題を明らかにする。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「青い海と白い砂浜」を観光資源化として、海外からも集客できるようなビーチリゾートを目指すために、下地島空港の再利用やクルーズ船専用のバースの建設など宮古島市が施策を講じてきた。マリンツーリズムは主に海水浴が多い。また、宮古島ではマリンメニュー以外の観光メニューの開発も難しいとわかった。さらに、増え続ける観光客に対しては、三つの問題点が見つかった。それらは「急速な国際観光化によって、地域社会はどのように変容するか?」「宮古島の国際観光化をどのように進めていくか?」、「宮古島が世界有数のビーチリゾートとして発展していくために、必要な開発と環境保護とは何か?」という問題である。

研究成果の概要(英文)：This study is a sociological study of tourism related to marine tourism, which is a major tourism action menu in Okinawa, which has been booming in recent years. The purpose of this research is to investigate and analyze the present situation and problems of marine tourism in Miyakojima, Okinawa, historically and by item, sociologically. Tourism development in Miyakojima has progressed in recent years, and the "blue sea and white sandy beach" has been made into a tourism resource, achieving economic development through tourism. Analyze and consider by interview survey and participant observation of people related to marine tourism in Miyakojima, tourists, local residents, public officials, clarify the development and limits of beach resorts, problems and issues facing marine tourism.

研究分野：社会学

キーワード：マリンツーリズム ビーチリゾート 観光開発 環境保全 宮古島 フィールドワーク

1. 研究開始当初の背景

本研究は、近年、観光ブームでわく沖縄の、主要な観光行動メニューであるマリントーリズムに関する観光社会学的研究である。本研究の目的は、沖縄県宮古島におけるマリントーリズムの現状と課題について、歴史的に、そして種目ごとに、社会的に調査・分析することにある。宮古島は、近年観光開発が進み、「青い海と白い砂浜」を観光資源化し、観光による経済発展を遂げてきた。また、ダイビング業者と地元漁協が海の利用を巡って、法的に争ってきたことでも有名であった。宮古島のマリントーリズム関係者や観光客、地元住民、公的関係者に対するインタビュー調査と参与観察によって分析・考察し、マリントーリズムの抱える問題点と課題を明らかにする。

キーワード：観光社会学、マリントーリズム、環境保全と観光利用、社会調査

2. 研究の目的

宮古島は、「青い海と白い砂浜」を観光資源化とし、順調に観光客数を伸ばしてきた。2002年に、340,492人だったのが、2010年に404,144人、2015年に513,601となり、初めて50万人を超えた。2016年703,055人、2017年に988,343人、2018年に1,143,031人となり100万人を達成した。空路が688,87人、順調延びてきたクルーズ船から国際観光客454,157人であった。2019年は台風などの影響でクルーズ船の来港が減り、1,061,323人となった。

将来、観光客200万人時代を想定する宮古島市には、二つの施策があった。2019年3月の下地島空港旅客ターミナルの供用開始と、2020年4月供用開始予定だった平良港国際クルーズ船拠点整備事業である。大幅に増えた観光客に対して、宮古島がどのような対策を行うかも調査し、マリントーリズムを基盤とするビーチアイランドとしての発展の可能性と限界について明らかにする。

3. 研究の方法

文献調査と、宮古島のマリントーリズム関係者や観光客、地元住民、公的関係者に対するインタビュー調査と参与観察とによって分析・考察する。また、国内外の著名な観光名所と比較調査を行い、宮古島の観光開発と環境保全が抱える問題点を明らかにする。

比較調査は、国内では京都、大阪、別府、国外では、アメリカ合衆国ハワイ州オアフ島、インドネシア共和国ランカウイ島、フィリピン共和国ボラカイ島、タイ王国サムイ島とナンユアン島である。海外調査地では、ビーチリゾートの発展と限界、マリメニューの調査を行った。

4. 研究成果

「青い海と白い砂浜」を観光資源化として、海外からも集客できるようなビーチリゾートを目指すために、宮古島市が施策を講じてきた。マリントーリズムは、主に海水浴が多く、マリントーリズムメニューであるシュノーケルリングやスクーバダイビング、カヌーなどは利用客が少なかった。また、マリメニュー以外の観光メニューの開発も難しいとわかった。さらに、増え続ける観光客に対しては、いくつかの問題点が見つかった。

一つ目は、沖縄県の宮古島では、ここ数年でクルーズ船を利用した外国人観光客が急増し、島の観光産業のあり方を大きく変えつつあることについてである。これは、「急速な国際観光化によって、地域社会はどのように変容するか？」という問題である。方法は、文献調査とインタビュー調査、参与観察を用いた。インタビューは、宮古島の観光協会、観光業者（タクシーとレンタカー）、地域住民、観光客に対して行った。調査の結果、宮古島のクルーズ船観光の始まり、それによる観光業者の形態の変化、地域住民の対応、観光客から見た宮古島の特徴などがわかった。解決すべき問題としては、急速な国際観光化と地域社会とのミスマッチの問題、宮古島の地域社会は観光化の流れから言ってローカル・ルールからナショナル・ルールへの変更を余儀なくされていく問題がある。日本社会が少子高齢化で地域が衰退していく中で、宮古島は国際観光化という道を選んだ。国際観光化によって、新たな産業や雇用も誕生している。宮古島の地域社会は国際観光化によって変容せざるを得ず、小さな島での国際観光化の成功事例となるようにしなければならないと結論づけた。

二つ目は「宮古島の国際観光化をどのように進めていくか？」という問題である。宮古島では、海外LCC路線を呼び込むための下地島空港国際線旅客ターミナル整備事業が2019年3月に始まり、大型クルーズ船が接岸でき、クルーズ船の寄港を増加させるとする平良港国際クルーズ船拠点整備事業が完成間近である。この二つの事業について、関係者から詳しく話を聞き、この二つの事業の目的と開業時の見込みから、宮古島の国際観光地化が成功するのかどうかを検討した。そして、観光客200万人時代を想定する宮古島の将来の姿とその問題点を考察した。その結果、宮古島市は、超少子高齢化が進んでいる日本国内からの観光客だけを当てにするのではなく、海外LCC路線やプライベートジェット、クルーズ船からの国際観光客の往来を見込んでいる。世界的に見ても、宮古島のビーチの美しさは、海外の有名ビーチと比較しても、遜色がなく、適切なプロモーションを行えば、国際観光客は順調に増えていくだろう。問題点は、インターネット、交通などのインフラの整備と、島民との摩擦が生じ観光公害の予兆がすでに出ている点である。

三つ目は、「宮古島が世界有数のビーチリゾートとして発展していくために、必要な開発と環境保護とは何か？」という問題である。2018年に約114万人の観光客が宮古島を訪れた。宮古島市の計画によると、宮古島市では、2028年には観光客200万人を予測し、その準備を進めている。海外のアイランドリゾートでビーチが有名な5ヶ所のビーチを調査し、宮古島のビーチリゾートとしての発展の可能性を分析・考察した。海外の著名なビーチリゾートが環境破壊や開発過多でその評判を落としていた。ビーチリゾートの発見 観光開発 名声の獲得 過多 環境破壊 観光客減という過程をたどっていた。そして、ビーチの環境を左右する宮古島の上水道と下水動の現状について調査した。この問いの答えとして、宮古島の観光資源と地域住民に過度の負荷をかけない持続的発展と、ビーチを汚染しないための水資源の確保と水質維持による環境保護を提案している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 圓田浩二	4. 巻 28
2. 論文標題 沖縄県宮古島におけるクルーズ船観光の現状と地域社会の変容	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 沖縄大学法経学部紀要	6. 最初と最後の頁 28-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 圓田浩二	4. 巻 30
2. 論文標題 国際観光地「宮古島」のための二つの挑戦 - 下地島空港国際線旅客ターミナル整備事業と平良港国際クルーズ船拠点整備事業 -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 沖縄大学法経学部紀要	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 圓田浩二	4. 巻 28
2. 論文標題 沖縄県宮古島におけるクルーズ船観光の現状と地域社会の変容	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 沖縄大学法経学部紀要	6. 最初と最後の頁 25-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） ISSN1346-3128	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----